

第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

安心とともに

沖縄県 浦添市立浦添中学校 二年生

糸数 丞太朗

テレビでいくつもの保険の宣伝を見る。

「●歳からでも入れます。」

「まずは見積りから。」

お決まりのセリフは右の耳から左の耳へと通りすぎ、保険がいったいなんなのか考えたことはなかった。

「お母さんは保険に入っているの？」

僕の質問に意外な答えがかえってきた。

「うん。いくつも入っているよ。」

僕の母は僕を生んですぐにシングルマザーになった。それまで母は一つも保険に入っていなかったらしい。母親になり、さらにシングルマザーになったことで、母の意識はがらりと変わった。『もし、私になにかあったら、この子はどうなるんだろう。』ちやうどその頃ハローワークで職を探していた母は、保険会社の説明会に参加した。保険の大切さをそこで知り、保険会社へ就職はしなかったもののそれからいくつもの保険を探し始めたらしい。生活は苦しかったので営業職員と保険の内容や金額を何度も検討し、できる範囲内で保険に入ったそうだ。

小学六年生の時、通学途中に僕は横断歩道で車にひかれた。救急車で病院に運ばれ、知らせを受けた母は仕事場からかけつけてくれた。幸い僕はかすり傷ですみ、事なきを得たが時給で働く母を仕事の途中でぬけさせてしまったことに申し訳ない気持ちでいた。後で知ったのだが、実はこの一カ月前に母は僕のためにケガ保険に加入していたのだ。きっかけは祖父が僕に自転車をプレゼントしてくれたこと。それなら！と保険に入ったらいい。この保険から僕の事故時の見舞金が支払われ、母は仕事を急に欠勤することになったも、その給料の分はまかなえたそうだ。この話を知って「保険は万が一のお守り」なんていう保険会社のフレーズが頭に浮かんた。

さて、僕の母は離婚をきっかけに加入した生命保険を一度も使うことなく、今日も元気に笑っている。保険に加入しているか聞いた僕に母はこう言った。「保険は使わないならその方が最高。それなら加入しないという選択もあるけど保険というのは使う使わないの前に、生きていく上で土台となる“安心”をくれるもの。だから私は迷わず加入したよ。」

第59回中学生作文コンクール

そして今年、母は十三年ぶりに再婚。ペットのトイプードルも加わり僕の家
族はにぎやかになった。家族の形は変わっても僕たちの暮らしに「安心」は必
要だ。大好きなペットも保険に加入した。これから母も父も年老いていく。そ
の上コロナ禍にあつては、誰しも明日の健康なんて分からない。だからこそ僕
たちは保険のを知り、万が一に備えることで明日を心配することなく今を
思い切り楽しむことができるんじゃないか。僕はそう思う。